

例会抄録

幕末・明治初期の電気治療

中村 昭

江戸時代中頃に平賀源内らが静電気の起電機（これをエレキテルと言った）の実験をしたことはよく知られているが、これは実地の医療的応用にまでは至らなかった。

蘭学も幕末の頃には物理学、電気学等の分野までかなり水準が高くなり、電気治療も実際に行われるようになった。その一つの資料として、安政五年に出た『内服同功』という刊本がある。これは内服薬以外の種々の治療法を図解して説明したものであり、この中にエレキテルの器械の作り方とその応用方法も含んでいる。また万延元年に出た『内服同功』続篇ではボルタ式電池の作り方や、ファラデーの感伝電流の作り方も具体的に説明しており、治療上実際に使われていたことが確かである。

明治初年に移ると、明治五年から七年にかけて出版された『東校医院治験録』の中にも図解入りで、ドイツ人教師のミュラーとホフマンが行った電気治療の詳しい説明がある。

ここで行われた電気治療は直流または感伝電流による電気刺激療法、直流による電気灼断療法、ブリーシーによる電気分解療法等

である。これらの器械はドイツから取り寄せたものであり、ミュラーとホフマンはその頃の最新の治療法を示説したと思われる。

（平成二年六月例会）

◇◇◇◇◇ 紹 介 ◇◇◇◇◇

三浦豊彦著『労働と健康の歴史 第六巻』

本書は『労働と健康の歴史』の第一巻から第四巻と、『労働と健康の戦後史』の五冊の要約とも言える『労働衛生通史』を中心に、展望、労働衛生史、医史学と私、及び僕の昭和史の四部構成となっており、著者の喜寿を祝って出版されたものである。

今迄、著者が労働衛生史を精力的に発表してきたこと、生涯を労働科学研究所とともに歩んだことは多くの学会員の知るところである。また、最近は労働衛生史の普及と後進の育成のために日本産業衛生学会のなかに「労働衛生史研究会」を作り、その主催で御苦労されている。

労働衛生史は労働者側、経営者側、行政、労働衛生学者、さらに個々の職業病や労働条件を歴史的にみる等の立場でその内容に相違がでてくる。このようななかで三浦の研究態度はおおむね中立的であり、事実を事実として記述している。これは通史を書く時の基本条件である。三浦はこの通史を書ける数少ない、いや唯一の研究者であらう。